

明けましておめでとうございます。

新しい年、新しい思いで、新しい活動に取り組みます。

「復興支援」で福島に出向くことを初めとして、本誌への投稿、編集、国会議員への配布（ポスティング）、院内集会と連絡会議など、行動隊の皆さまが積極的に参加されることを期待しています。

代表理事 安藤 博

2018/12/13 院内集会

講演：三浦広志＜野馬土＞代表

院内集会第二シリーズ「原発被災地県 福島復興」③に NPO＜野馬土＞代表の三浦広志さんを講師にお迎えして「農業の復興に寄与したい ＜野馬土＞のアプローチ」を 12 月 13 日に行いました。講演は 1 時間 30 分余に及び、事故直後の避難生活に始まり 20 年後の計画までお話ししていただきました。

悲惨な避難生活

「事故当日は税金総行動の日で、仲間たちとデモの準備中でした。震度 6 強 6 分連続の地震でした。みんな動けないので固まっていた。事故後に警察から言われたことがあります、『あなた方は固まっていたので被害者が少なくすんだのです』と」。

「最初の避難場所は南相馬市小高区最南端（双葉郡境）の福浦小学校でした。それから避難場を 4 か所移動して相馬市の避難所に移りました。そこではあなたたちは相馬市民ではないと言われて遺体安置所わきの廃校に移されました」。

この避難場所はとにかくひどかったようです。三浦さんは

「遺体の臭気がひどく、コンクリートの床にブルーシートを敷き、その上に毛布一枚で寝た」と語っていました。その後、伊達市の親戚宅、東京へと避難されたそうです。



苦しかった避難生活をユーモアも交えて語る三浦さん

避難先で地震・津波災害からの農業再開

2011 年 6 月から相馬市の新地町で農地の復旧のための組合活動を始めました。2012 年から国の事業として津波・地震被害の農機具・施設の復旧が始まりました。この年の 6 月からお米の全量全袋検査が開始されました。そればかりでなく福島農産物は

全て放射能検査を行える体制が整いました。

「<野馬土>では安全な農産物を供給するために日仏会館の応援で直売事業を始めました。他方、県民の50%以上が福島産の産物を食べないという調査結果もありましたので他県産の農産物も販売することにしました」。

国・東電との直接交渉で道を開く

「交渉の日々が未だに続いています。そして3~4か月に一度位は東京で東京電力本店や政府省庁と交渉しています。2011年4月26日には牛を連れて東電本社に交渉にいきました。被害者である農民が直接自分の声を国や東京電力にぶつけることで、農民自身が交渉から帰ってくると元気になります。被害者・農民が黙っていたら、賠償交渉はどんどん収束に向かってしまいます。

『生業を返せ、地域を返せ』福島原発訴訟は原告4000名、10月から仙台高等裁判所で控訴審が始まりました。被害の深刻さを裁判長に認識させようと原告団・弁護団で現場検証を行うことを要請したところ裁判長は受け入れました。この訴訟は国と東電の責任を明確にし、未来につなげる重要な裁判と捉えています」。

大切なのは、人間の元気を復活させること

今、一番力を入れていることは昔の市町村の枠に捉われないコミュニティの再構築です。そのため農業のワークショップや野馬土カフェを活用した交流・

教室を開いています。全国・世界へ伝える原発20km圏内ツアーには多くの若者が参加してくれています。<野馬土>の『感謝祭』や『収穫祭』のボランティアとして毎年、兵庫から多くの学生さんが手伝いに来てくれます」。

太陽光発電と農業の組み合わせ『半農半エネ』で、負債からの復活

「津波で、海辺にあった米倉庫(日通の倉庫)が崩壊して米8600万円分が流されてしまいました。この負債には保険が効かず賠償問題が出てきました。そこで交渉を始め、まず、返済の凍結を求めて国・農水省と交渉して、新たな制度を築きました。「東日本大震災支援事業者支援機構」です。その認定第一号となりました。5年間元金返済は凍結され、金利0.4%です。その間に500kWの太陽光発電事業を開始して、土地の使用料などを農家所得の補填に当てることにしました。3メガくらいを売却して1年間に1億5千万円くらいを地域で使えるようにしたのです。相馬地域全体に発電所を建設して農業と再生可能エネルギーを推進する合同会社を設立しました。新地町に合同会社みさき未来、南相馬市に合同会社金谷村守りソーラーを創設しました。

外からの応援や交流が地域を変える力になると捉えています。現在、井田川地区再生ビジョンや風力発電所の建設を模索しているところです」。

寒かった、きつかった、楽しかった

安藤 博

昨年11月半ばに行った福島活動のための“営業”を受けて、12月16日から19日までの3泊4日で川内村にぶどう園の越冬作業手伝いに行ってきました。【かわうちワイン株式会社】のぶどう園で育成中のぶどう樹を凍害から護る防寒作業です。茨城県笠間市の高橋済、杉山隆保、わたくし安藤博の三人が地区の集会所に泊まって、午前4時間半、午後3時間半。行動隊としては初めての本格的に身体を動かす行動でした。

山間地の川内村は、福島県内でも寒いところとされていますが、その川内村のなかでもぶどう園（高田島ヴィンヤード）のある高田島地区はいちばんに寒いと、三人三泊の自炊用に野菜や豆腐や魚の缶詰などを仕入れた村の売店のおばちゃんと言っていました。確かに寒かったあ！晴れていれば午前中は汗ばむほどですが、午後3時を過ぎると冷えてきます。特に風のある日は寒さがこたえます。

朝8時、ブドウ園を見下ろす山道に車を駐めてミーティングです。ぶどう園長の遠藤公明（しげあき）さんが、その日の作業計画を伝えたあと、それぞれがアルミホイルなどの防寒資材を持ってぶどう樹の列にとりつき作業にかかります。地元のおばちゃんが7-8人、おじさんが3-5人。後から、東京電力復興本社（富岡町）の3-4人がやってきます。週末には関東地方などからのボランティア団体グループも作業に加わります。

作業は二人一組。樹列をはさんで向かい合い、防寒シートを次々に苗木に巻き付けていきます。長さ約70センチ・幅約30センチのプチプチビニールシートとアルミホイルの二枚を合わせてぶどう樹に巻きつけます。まずは地面から40-60センチの茎に縦に。ひとしきり縦の作業がおわると、次は縦作業を終えた樹列にかかり茎の先の蔓50-70センチを横に曲げたのに巻きつけます。約2m間隔で植えられた樹列が150-200m。その樹列が約2.5mの



夕暮れ、寒気が募って来るが、おばちゃんたちは作業を続ける。



防寒材のアルミホイルでぶどう園は銀色に光る。

幅で上下に並び、かなり強い傾斜面を覆っています。全部で後楽園球場の約三倍、3ヘクタールに約11,000本。おばちゃんとの呼吸が合ってくると1本3分くらいで次の樹に移り、流れ作業のように進んでいくけれども、いくらやっても終わらない。

問題は、次の樹に移るための膝の曲げ伸ばしです。ぶどう樹脇に左片膝をつき左半身に構えて麻ひも縛りなどをする。縛る位置の高さによって膝を伸ばし腰を上げる、そうして上下しているうちに膝、腰の痛みが極限に達し、ついにはいざりのように這っていかざるを得なくなります。その点、おばちゃんたちは皆元気で、さっさと次の樹に移っていく。こちらは痛みを隠して懸命についていくのです。なんといっても慣れでしょう。さすがに4日目になると、立ったり座ったりの連続もさほど苦痛ではなくなっていました。

わたしたち最後の作業日の朝礼で遠藤園長は、SVCFメンバーへの謝意を述べるとともに、このプロジェクトの目標などを話してくれました。「ただ一つ、福島でいちばんいいワインをつくることです」と。ぶどう作りを始めて3年。目に見える製品が出来てこないことから、地元では不満の声も出始めている、しかし「2020年ワイン出荷」に向け計画は直実に進んでおりこの（2019年）秋にはぶどうが実り始める、ぶどう園上方の丘に地上2階・地下1階のワイン製造工場を建設する—遠藤園長は明るく力強くこのワインプロジェクトを語りました。ぶどう園作業の楽しさを覚えるいつときでした。

行動隊としては、新しい年の「福島復興支援事業」の一つとしてこのプロジェクトに取り組もうと思います。次は、今回巻き付けた防寒シートをはがす作業です。3月中旬—4月初旬を目途に川内村行きを計画し、1月末には作業員募集を行ってなるべく多くのメンバーで出向くことにしたいと思っています。



朝8時のミーティングで、遠藤園長が作業計画を伝える。

#####v#####

お相撲さんも楽じゃない！

安藤 博

「一年を十日で暮らすよい男」と言われたりしていたお相撲さんですが、一にも稽古、二にも稽古の厳しい毎日であることを、新年早々たまたま相撲部屋の朝稽古を見に行ったことで改めて知りました。家人が日米交流のおばさん団体の幹事役にいまなっていて、米側メンバーのおばさんが相撲部屋を見たいと言いついたため、案内係りとして東京山手線鶯谷駅近くの「藤島部屋」に朝7時に行かねばならない、車で連れて行って欲しいと言います。



家を5時には出なければならぬけれども、朝早いのは福島行きでなれているし、まだ見たことのない

朝稽古にも興味がわいてきて家人に付き合うことにしました。

7時を5分ほど過ぎたころ、親方が稽古部屋に入ってきました。準備運動のようなことをしていた13人の稽古力士たちに緊張が走ります。親方は竹棒を軍刀のように床に突き立てて力士たちを見据えます。

それから一時間半。息つくひまなく、主として「押し」の稽古が続きました。親方はときおり「スギ坊！」とか「アソ公！」といったように弟子を呼び寄せて「押し」の基本をダメ押しします。要は「息もつかずに押し通せ」ということなのですが、息も絶え絶えになっているところに「息もつかずに」はなかなかの難事であろうと、見物のこちらにも察しられます。

米国人たちは畳に座り続けているのがつらそうでした。こちらは、大詰めになっているこの1月号『SVCF通信』の編集に思わぬじまが入って、印刷所渡しが遅れないかと心配でした。が、もう一つの心配が相撲稽古見学で解消しました。原稿が不足して空きができそうだったので、こうして埋めることができたのです。

連絡会議にご参加ください！

毎週1回、事務連絡やプロジェクト事業の進捗確認をするため、午前10時30分から一時間余、東京・神田淡路町の事務所で会議を行います。福島原発行動隊メンバーなら、どなたでも参加できます。多くの方々の参加をお待ちしています。

【1月予定】

- 院内集会：17日(木曜) 11-13時
- 連絡会議：11日(金曜)、18日(金曜)、25日(金曜)、26日(土曜)
- 『SVCF通信』：11日(金曜)発行

